

「死生学 他者の死と自己の死」

聖路加看護大学副学長 山本 俊一 著

多賀須消化器科・内科クリニック

多賀須 幸男

著者はこの本を日本初の衛生学的死生学の教科書と位置づけている。個人および社会の健康増進をめざす衛生学の立場で死生学を解説しようとする著者のユニークな試みは、大成功したようにみえる。ちなみに山本俊一氏は6代目の東大衛生学教授で、1992年には医学書院から「死生学のすすめ」を出版している。

副題が示すように、本書は第1部“他者の死”と、第2部“自己の死”から構成され、それぞれ130頁、174頁が当てられている。著者によると両者はまったく別物であり、死生学を始めるにあたってまずその区別をはっきりしなくてはならない。“自己の死”をどう理解するかによって、“他者の死”の理解が変わってくる。本書は、この2つを合成するために書かれた。

第1部の圧巻は古今東西の言葉を縦横に引用し、多少とも難解な箇所には周到な解説をつけて、死生観の

成り立ちが古代から現代まで立体的にまとめられているところにある。引用文は適切な分量で、難しいことを述べながら少しも晦渋するところがない著者の文章力はたいしたものである。理論の組み立てもすばらしい。歴史的、社会的、あるいは文化人類学的な死生学の教科書でもある。

第1部では死生学そのものの歴史的發展が語られたのに対し、第2部では成長・加齢に伴う死生観の変遷が解説されている。ここでも多くの詩や箴言が引用されているが、自己の死が体験できないものである以上、科学の1部門であることを標榜する医学には手に負えない感じもある。

死生学の理論モデルとして、第1部では免疫反応に擬した“死生反応”なる考え方が、第2部ではフロイドのリビドーに対する“モリドー”という新造語が導入されている。死生反

応に基づく死生学の教育論は、われわれには納得しやすい。

脳死やターミナル・ケアに関する書物が次々に出版される。多少うわっ調子なそれらとは異なり、本書は死生学を正面から取り上げた教科書である。更にまた、本書を読んで死生学は文化そのものであり、必要なのは“日本人の死生学”であることを痛感する。医療に携わるものだけでなく、生と死を真剣に考えるすべての人に推薦したい。

自分が高校時代に「方丈記」や「徒然草」に何の感慨も湧かなかったことを思い出して、人生の上り坂にある若い学徒がどこまでこの本の真髄を汲み取れるか危惧の念がないわけでもないが、学生諸君もぜひ熟読して欲しい。索引がないのが残念である。

● A5 頁328 表1 1996
定価(本体3,500円+税) 円400

医学書院 刊(☎ 03-3817-5657)